

第1章 医薬品に共通する特性と基本的な知識

問1

医薬品に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 市販後にも、医学・薬学等の新たな知見、使用成績等に基づき、その有効性、安全性等の確認が行われる仕組みになっている。
- b 効能効果、用法用量、副作用等の必要な情報が適切に伝達されることを通じて、購入者が適切に使用することにより、初めてその役割を十分に発揮するものである。
- c 人の疾病の診断、治療若しくは予防に使用されること、又は人の身体の構造や機能に影響を及ぼすことを目的とする生命関連製品であり、使用に際して保健衛生上のリスクを伴わないものである。
- d 殺虫剤の中には誤って人体がそれに曝されれば健康を害するおそれがあるものもある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問2

医薬品の不適正な使用に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 医薬品の不適正な使用を繰り返すことによって慢性的な臓器障害等を生じるおそれがある。
- 2 経口服液剤は、有効成分の血中濃度が上昇しやすいことから、乱用を防ぐために習慣性や依存性がある成分は、配合されていない。
- 3 定められた用量を守って医薬品を服用しても、みだりに他の医薬品や酒類と一緒に摂取することは、適正な使用とはいえない。
- 4 一般用医薬品は、購入者の誤解や認識不足のために適正に使用されないことがある。

問3

医薬品の投与量と効果又は毒性の関係に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 少量の医薬品の投与でも発がん作用、胎児毒性や組織・臓器の機能不全を生じる場合がある。
- 2 薬物用量を増加させるに伴い、効果の発現が検出されない「最小有効量」から、「治療量」に至る。
- 3 治療量上限を超えると、効果よりも有害反応が強く発現する「中毒量」となる。
- 4 50%致死量（LD₅₀）は薬物の毒性の指標として用いられる。

問4

免疫及びアレルギー（過敏反応）に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 免疫は、本来、細菌やウイルスなどが人体に取り込まれたとき、人体を防御するために生じる反応である。
- b 医薬品の有効成分だけでなく、基本的に薬理作用がない添加物も、アレルギーを引き起こす原因物質（アレルゲン）となり得る。
- c 普段は医薬品にアレルギーを起こしたことがない人でも、病気等に対する抵抗力が低下している状態などの場合には、医薬品がアレルゲンになりやすくなり、思わぬアレルギーを生じることがある。
- d アレルギーには遺伝的な要素もあるので、普段は医薬品にアレルギーを起こしたことがない人でも、近い親族にアレルギー体質の人がいる場合には、注意が必要である。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問5

医薬品に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 適正な使用がなされる限りは安全かつ有効な医薬品であっても、不適正な使用により薬物依存が生じることがあり、一度、薬物依存が形成されると、そこから離脱することは容易ではない。
- b 医薬品には、製造販売後の調査及び試験の実施の基準として Good Laboratory Practice (GLP) が制定されている。
- c 医薬品を使用した場合には、期待される有益な反応（主作用）以外の反応が現れることがある。特段の不都合を生じないものであれば、通常、副作用として扱われることはないが、好ましくないもの（有害事象）については一般に副作用という。
- d 一般用医薬品を使用することによって慢性疾患の症状が悪化したり、その治療が妨げられたりすることはない。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	誤	正	誤
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	誤	正	誤	誤

問6

医薬品と食品の相互作用に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 食品中に医薬品の成分と同じ物質が存在する場合があります、その物質の摂取される総量が継続して過剰にならないよう注意を促すことが重要となることがある。
- 2 酒類（アルコール）をよく摂取する者では、肝臓の代謝機能が高まっていることが多い。その結果、アセトアミノフェンなどでは、通常よりも代謝されやすくなり、体内から医薬品が速く消失して十分な薬効が得られなくなることがある。
- 3 食品と医薬品の相互作用は、しばしば「飲み合わせ」と表現されるが、内服薬以外であっても、食品によって、医薬品の作用や代謝が影響を受ける可能性がある。
- 4 中和反応によって胃酸の働きを弱めること（制酸）を目的とする成分を主体とする胃腸薬については、炭酸飲料等の酸度の高い食品と一緒に服用すると、効き目が強くなり過ぎるおそれがある。

問7

妊婦及び母乳を与える女性（授乳婦）が医薬品を使用する上で注意すべき事項に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 妊婦が一般用医薬品を使用しようとする場合は、そもそも一般用医薬品による対処が適切かどうか慎重に検討すべきである。
- b 一般用医薬品の妊婦の使用については「大量に使用しないこと」としているものが多い。
- c 妊娠中にしばしば生じる睡眠障害は、ホルモンのバランスや体型の変化等が原因であり、抗ヒスタミン成分を主薬とする睡眠改善薬の適用対象である。
- d 吸収された医薬品の一部が乳汁中に移行することが知られていても、通常の使用の範囲では具体的な悪影響は判明していないものもある。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	誤	正	誤
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	誤	正	誤	誤

問8

高齢者が医薬品を使用する上で注意すべき事項に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 高齢者は基礎体力や生理機能の衰えの度合いの個人差が小さく、年齢からどの程度副作用のリスクが増大しているか容易に判断できる。
- 2 肝臓や腎臓の機能が低下していると、医薬品の作用が強くなりやすく、若年時と比べて副作用を生じるリスクが高くなる。
- 3 生理機能が衰えている高齢者では、既定用量の下限で一般用医薬品を使用しても、なお作用が強過ぎる等の問題を生じる場合がある。
- 4 医薬品の副作用で口渴を生じることがあり、その場合、誤嚥（食べ物等が誤って気管に入り込むこと）を誘発しやすくなるので注意が必要である。

問 9

一般用医薬品の使用に配慮が必要な人等への登録販売者の対応に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 医療機関で治療を受けている人に対して、医療機関・薬局で交付された薬剤と一般用医薬品との併用の可否を登録販売者において判断することは、困難なことが多く、その薬剤を処方した医師若しくは歯科医師又は調剤を行った薬剤師に相談するよう説明した。
- 2 母乳を与える女性（授乳婦）に対して、乳幼児に好ましくない影響が及ぶことが知られている一般用医薬品について、授乳期間中の使用を避けるか、使用后しばらくの間は授乳を避けるよう説明した。
- 3 過去に医薬品を服用し薬疹を経験した人から、再度同種の医薬品を服用したいと申し出があり、定められた用量の半量で様子を見ながら服用するよう説明した。
- 4 必要以上の大量購入や頻回購入を試みる不審な購入者に、積極的に事情を尋ねたり、状況によっては販売を差し控える対応をした。

問 10

医薬品を使用する上で注意すべき事項に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 幼児に使用される錠剤やカプセル剤などの医薬品では、服用時に喉につかえやすいので注意するよう添付文書に記載されているものがある。
- b 乳児向けの用法用量が設定されている一般用医薬品であれば、使用の適否を見極めやすいため、乳児にはこのような一般用医薬品による対処が最優先される。
- c 成人用の医薬品の量を減らして小児へ与えるような安易な使用は避け、必ず年齢に応じた用法用量が定められているものを使用すべきである。
- d 医薬品の使用上の注意において、幼児のおおよその目安は3歳未満である。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問 1 1

医薬品の品質に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品の品質管理基準として Good Vigilance Practice (GVP) が制定されている。
- b その品質が承認等された基準に適合しない医薬品、その全部又は一部が変質・変敗した物質から成っている医薬品の販売は医薬品医療機器等法により禁止されている。
- c 医薬品は、高い水準で均一な品質が保証されており、配合されている成分（有効成分及び添加物成分）は、高温や多湿、光（紫外線）等によって品質の劣化（変質・変敗）を起しにくいものが多い。
- d 液剤などでは、いったん開封されると記載されている「使用期限」まで品質が保証されない場合がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 1 2

プラセボ効果（偽薬効果）に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 薬理作用によりプラセボ効果が生じることもある。
- b 一般用医薬品の購入者等がプラセボ効果により、適切な医薬品の選択、医療機関の受診機会を失うことのないよう、正確な情報が適切に伝えられることが重要である。
- c プラセボ効果は、客観的に測定可能な変化として現れることはない。
- d プラセボ効果は、条件付けによる生体反応が関与して生じる場合がある。

1 (a、b) 2 (a、c) 3 (b、d) 4 (c、d)

問 1 3

一般用医薬品に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品で対処可能な範囲は、医薬品を使用する人によって変わることはない。
- b 健康状態の自己検査に用いられることがある。
- c 健康の維持・増進に用いられることがある。
- d 症状の原因となっている疾病の根本的な治療がなされないまま、手軽に入手できる一般用医薬品を使用して症状を一時的に緩和するだけの対処を漫然と続けていると、適切な治療の機会を失うことにつながりやすい。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 1 4

一般的に「健康食品」と呼ばれる健康増進や維持の助けとなる食品（以下「健康食品」とする。）に関する記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 健康食品の安全性や効果を担保する科学的データは、医薬品と同等でなければならない。
- 2 「機能性表示食品」は、疾病に罹患した者の健康の維持及び増進に役立つ旨又は適する旨を表示するものである。
- 3 「栄養機能食品」は、例えばキシリトールを含む食品に対して、「虫歯の原因になりにくい食品です」などの「栄養機能の表示」が許可されている。
- 4 保健機能食品（特定保健用食品、栄養機能食品及び機能性表示食品）を除く健康食品の医薬品医療機器等法や食品衛生法における取扱いは、一般食品と変わるところはない。

問 15

医薬品販売時の登録販売者の対応等に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品の場合、必ずしも情報提供を受けた本人が医薬品を使用するとは限らないことを踏まえ、販売時のコミュニケーションを考える必要がある。
- b 購入者が、自分自身や家族の健康に対する責任感を持ち、適切な医薬品を選択して、適正に使用するよう、働きかけていくことが重要である。
- c 生活者のセルフメディケーションに対して、登録販売者は、第2類医薬品及び第3類医薬品の販売、情報提供等を担う観点から、支援していくという姿勢で臨むことが基本となる。
- d 情報提供を受ける購入者が医薬品を使用する本人で、かつ、現に症状等がある場合には、言葉によるコミュニケーションから得られる情報のほか、その人の状態や様子全般から得られる情報も、状況把握につながる重要な手がかりとなる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 16

サリドマイドに関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 過去には、催眠鎮静成分として承認され、その鎮静作用を目的として、胃腸薬にも配合されていた。
- 2 サリドマイドによる薬害事件は、日本でのみ被害が発生し、出荷停止、販売停止及び回収措置等の対応の遅さが問題視された。
- 3 妊娠している女性が摂取した場合、血液-胎盤関門を通過して胎児に移行する。
- 4 胎児はその成長の過程で、サリドマイドにより血管新生が妨げられると細胞分裂が正常に行われず、器官が十分に成長しないことから、先天異常が発生する。

問 17

スモン訴訟に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 整腸剤として販売されていたキノホルム製剤を使用したことにより、亜急性脊髄視神経症（英名 Subacute Myelo-Optico-Neuropathy の頭文字をとってスモンと呼ばれる。）に罹患したことに対する損害賠償訴訟である。
- b スモン訴訟の被告である国は、スモン患者の早期救済のためには、和解による解決が望ましいとの基本方針に立っているが、全面和解には至っていない。
- c キノホルム製剤は、1958年頃から消化器症状を伴う特異な神経症状が報告されるようになり、日本では、1959年9月に販売が停止された。
- d キノホルム製剤には、一般用医薬品として販売されていた製品もある。

1 (a、c) 2 (b、c) 3 (b、d) 4 (a、d)

問 18

HIV訴訟に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 血友病患者が、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）が混入した原料血漿から製造された血液凝固因子製剤の投与を受けたことにより、HIVに感染したことに対する損害賠償訴訟である。
- b HIV訴訟を契機として、医薬品の副作用による健康被害の迅速な救済を図るため、医薬品副作用被害救済制度が創設された。
- c HIV訴訟を契機として、医薬品副作用被害救済・研究振興調査機構（当時）との連携による承認審査体制の充実、緊急に必要とされる医薬品を迅速に供給するための「緊急輸入」制度の創設等を内容とする改正薬事法が1996年に成立し、翌年4月に施行された。
- d 1996年3月に大阪地裁、東京地裁での和解が成立した後、厚生省（当時）は、医薬品による悲惨な被害を再び発生させることのないよう「誓いの碑」を建立した。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 19

クロイツフェルト・ヤコブ病（以下「CJD」とする。）に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a CJD訴訟とは、脳外科手術等に用いられていたウシ乾燥硬膜を介してCJDに罹患したことに対する損害賠償訴訟である。
- b CJD訴訟を一因として、2002年に行われた薬事法改正に伴い、生物由来製品の安全対策強化、独立行政法人医薬品医療機器総合機構による生物由来製品による感染等被害救済制度の創設等がなされた。
- c CJDは、ウイルスの感染が原因とされる。
- d CJD訴訟は、国、原因となった製品の輸入販売業者及び製造業者を被告として提訴された。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問 20

医薬品の副作用等に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a いわゆる薬害は、医薬品を十分注意して使用すれば起こらない。
- b 新規に開発される医薬品のリスク評価は、医薬品の安全性に関する非臨床試験の基準である Good Clinical Practice (GCP) に準拠して行われる。
- c 医薬品は、人体にとって本来異物であり、治療上の効能・効果とともに何らかの有害な作用（副作用）等が生じることが避けがたいものである。
- d 医薬品の副作用として、科学的に解明されていない未知のものが生じる場合もある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

第3章 主な医薬品とその作用

問2 1

かぜ及びかぜ薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a かぜとよく似た症状が現れる疾患は多数あり、急激な発熱を伴う場合や、症状が4日以上続くとき、又は症状が重篤なときは、かぜではない可能性が高い。
- b かぜの約8割は細菌の感染が原因であるが、それ以外にウイルス（ライノウイルス、コロナウイルス、アデノウイルスなど）の感染がある。
- c かぜであるからといって必ずしもかぜ薬（総合感冒薬）を選択するのが最適とは限らない。発熱、咳、鼻水など症状がはっきりしている場合には、症状を効果的に緩和させるため、解熱鎮痛薬、鎮咳去痰薬、鼻炎を緩和させる薬などを選択することが望ましい。
- d かぜ薬は、細菌やウイルスの増殖を抑えたり、体内から取り除くことにより、咳や発熱などの諸症状の緩和を図るものである。

1 (a、c) 2 (b、c) 3 (b、d) 4 (a、d)

問2 2

かぜ薬の配合成分とその成分を配合する目的との関係の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- | | (配合成分) | (配合目的) |
|---|------------|------------------|
| a | ブロムヘキシン塩酸塩 | － 発熱を鎮め、痛みを和らげる。 |
| b | メキタジン | － くしゃみや鼻汁を抑える。 |
| c | ノスカピン | － 咳を抑える。 |
| d | トラネキサム酸 | － 炎症による腫れを和らげる。 |

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 2 3

解熱鎮痛薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 解熱鎮痛薬の使用は、発熱や痛みを一時的に抑える対症療法であって、疾病の原因を根本的に解消するものではない。
- b 解熱鎮痛薬の連用により頭痛が常態化することがあるので注意を要する。また、解熱鎮痛薬を使用したときは症状が治まるものの、しばらくすると頭痛が再発し、解熱鎮痛薬が常時手放せないような場合には、薬物依存が形成されている可能性も考えられる。
- c 一般用医薬品の解熱鎮痛薬は、複数の有効成分が配合されている製品が多く、他の解熱鎮痛薬やかぜ薬、鎮静薬等が併用されると、同じ成分又は同種の作用を持つ成分が重複して、効き目が強く現れすぎたり、副作用が起こりやすくなったりするおそれがある。
- d 解熱鎮痛成分によって、解熱、鎮痛、抗炎症のいずれの作用が中心的となるかなどの性質が異なる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 2 4

解熱鎮痛薬の配合成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a アスピリン（アスピリンアルミニウムを含む。）及びサザピリンは、15歳未満の小児に対しては、いかなる場合も一般用医薬品として使用してはならない。
- b アセトアミノフェンは内服薬のほか、専ら小児の解熱に用いる坐薬に配合されることもあるが、内服薬と坐薬は作用部位が異なるため併用しても影響し合うことはない。
- c イブプロフェンは、解熱鎮痛成分（生薬成分を除く。）による胃腸障害を低減させることを目的として、配合されている場合がある。
- d エテンザミドは、痛みの発生を抑える働きが作用の中心となっている他の解熱鎮痛成分に比べ、痛みが神経を伝わっていくのを抑える働きが強いため、作用の仕組みの違いによる相乗効果を期待して、他の解熱鎮痛成分と組み合わせで配合されることが多い。

- 1 (a、c) 2 (b、c) 3 (b、d) 4 (a、d)

問 2 5

鎮暈薬及びその配合成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a ジフェニドール塩酸塩は、内耳にある前庭と脳を結ぶ神経（前庭神経）の調節作用のほか、内耳への血流を改善する作用を示す。
- b 脳への抑制作用により、平衡感覚の混乱によるめまいを軽減させることを目的として、ジプロフィンなどのキサンチン系と呼ばれる成分が配合されている場合がある。
- c 乗物酔いの発現には不安や緊張などの心理的な要因による影響も大きく、それらを和らげることを目的として、ブロムワレリル尿素（ブロモバレリル尿素）が配合されている場合がある。
- d スコポラミン臭化水素酸塩は、乗物酔い防止に古くから用いられている抗ヒスタミン成分である。

- 1 (a、b) 2 (a、c) 3 (b、d) 4 (c、d)

問 2 6

眠気を促す薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 抗ヒスタミン成分を主薬とする催眠鎮静薬は、睡眠改善薬として一時的な睡眠障害（寝つきが悪い、眠りが浅い）の緩和に用いられるものであり、慢性的に不眠症状がある人や、医療機関において不眠症の診断を受けている人を対象とするものではない。
- b アリルイソプロピルアセチル尿素は、脳の興奮を抑え、痛覚を鈍くする作用があり、少量でも眠気を催しやすい。
- c 体力中等度以上で精神不安があつて、動悸、不眠、便秘などを伴う高血圧の随伴症状（動悸、不安、不眠）、神経症、更年期神経症、小児夜なき、便秘に適する漢方処方製剤として麻黄湯がある。
- d ジフェンヒドラミン塩酸塩は、睡眠改善薬として、15歳未満の小児にも安心して使用できる。

- | | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 正 | 正 | 誤 | 誤 |
| 2 | 誤 | 正 | 正 | 誤 |
| 3 | 誤 | 誤 | 正 | 正 |
| 4 | 誤 | 誤 | 誤 | 正 |
| 5 | 正 | 誤 | 誤 | 誤 |

問 27

カフェインに関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 カフェインには、心筋を興奮させる作用もあり、副作用として動悸が現れることがある。
- 2 カフェインは、作用が弱いため、反復摂取により依存を形成することはない。
- 3 眠気防止薬におけるカフェインの1回摂取量はカフェインとして200mg、1日摂取量は500mgが上限とされている。
- 4 授乳中の女性が大量のカフェインを摂取したり、カフェインを連用したりした場合には、乳児の体内にカフェインが蓄積して、頻脈や不眠等を引き起こす可能性がある。

問 28

小児の疳を適応症とする生薬製剤・漢方処方製剤（小児鎮静薬）及びその配合生薬等に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a レイヨウカクは、ウシ科のサイカレイヨウ（高鼻レイヨウ）等の角を基原とする生薬で、緊張や興奮を鎮める作用等を期待して用いられる。
- b 小児鎮静薬を一定期間又は一定回数服用させても症状の改善がみられない場合は、その他の原因（例えば、食事アレルギーやウイルス性胃腸炎など）に起因する可能性も考えられるので、漫然と使用を継続せず医療機関を受診させるなどの対応が必要である。
- c 小児鎮静薬は、症状の原因となる体質の改善を主眼としているものが多い。
- d ジンコウは、ジンチョウゲ科のジンコウ、その他同属植物の材、特にその辺材の材質中に黒色の樹脂が沈着した部分を採取したものを基原とする生薬で、鎮静、健胃、強壮などの作用を期待して用いられる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 29

呼吸器官に作用する薬及びその配合成分に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 コデインリン酸塩、ジヒドロコデインリン酸塩は胃腸の運動を低下させる作用も示し、副作用として便秘が現れることがある。
- 2 マオウ（マオウ科のマオウ、チュウマオウ又はエフェドラ・エクイセチナの地上茎を基原とする生薬）は、気管支拡張のほか、発汗抑制、尿量減少等の作用も示す。
- 3 中枢性の鎮咳作用を示す生薬成分として、ハンゲ（サトイモ科のカラスビシャクのコルク層を除いた塊茎を基原とする生薬）が配合されている場合もある。
- 4 口腔咽喉薬の効果を兼ねた鎮咳去痰薬のトローチ剤やドロップ剤では、セチルピリジニウム塩化物等の殺菌消毒成分が配合されている場合がある。

問 30

鎮咳去痰薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 気管支の平滑筋に直接作用して弛緩させ、気管支を拡張させる成分として、ジプロフィリンがある。
- b コデインリン酸塩、ジヒドロコデインリン酸塩は、妊娠中に摂取された場合、吸収された成分の一部が血液-胎盤関門を通過して胎児へ移行することが知られている。
- c キョウニンはおオバコ科のおオバコの花期の全草を基原とする生薬で、去痰作用を期待して用いられる。
- d 甘草湯のエキス製剤は乳幼児にも使用されることがあるが、その場合、体格の個人差から体重あたりのグリチルリチン酸の摂取量が多くなることもあり、特に留意される必要がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問3 1

口腔咽喉薬、うがい薬（含嗽薬）に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 胸部や喉の部分に適用することにより、有効成分が体温により暖められて揮散し、吸入されることで鼻づまりやくしゃみ等のかぜに伴う諸症状の緩和を目的とする外用剤（塗り薬又は貼り薬）があるが、現在のところ、医薬品となっている製品はなく、いずれも医薬部外品（鼻づまり改善薬）として製造販売されている。
- b 含嗽薬の使用後にすぐに食事を摂った場合であっても、殺菌消毒効果が薄れることはない。
- c 口腔咽喉薬・含嗽薬は、口腔内や咽頭における局所的な作用を目的とする医薬品であるため、口腔や咽頭の粘膜から吸収されて循環血流中に入り、全身的な影響を生じることはない。
- d 噴射式の液剤は、息を吸いながら噴射すると気管支や肺に入ってしまうおそれがあるため、軽く息を吐いたり、声を出しながら噴射することが望ましい。

1 (a、b) 2 (b、c) 3 (c、d) 4 (a、d)

問3 2

口腔咽喉薬、うがい薬（含嗽薬）及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 日本薬局方収載の複方ヨード・グリセリンは、グリセリンにヨウ化カリウム、ヨウ素、ハッカ水、液状フェノール等を加えたもので、喉の患部に塗布して殺菌・消毒に用いられる。
- b 白虎加人参湯は体力に関わらず広く応用できる。しわがれ声、咽喉不快に適すとされるが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、食欲不振、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。
- c ラタニアはクラメリア科のクラメリア・トリアンドラ及びその同属植物の根を基原とする生薬で、咽頭粘膜をひきしめる（収斂）作用により炎症の寛解を促す効果を期待して用いられる。
- d 炎症を生じた粘膜組織の修復を促す作用を期待して、アズレンスルホン酸ナトリウム（水溶性アズレン）が配合されている場合がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問 3 3

胃の薬の配合成分とその成分を配合する目的との関係の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

	(配合成分)	(配合目的)
a	炭酸水素ナトリウム	－ 胃粘膜を覆って胃液による消化から保護する。
b	アルジオキサ	－ 過度な胃粘液の分泌を弱める。
c	ロートエキス	－ アセチルコリンの働きを促し、消化を助ける。
d	ピレンゼピン塩酸塩	－ アセチルコリンの働きを抑え、過剰な胃液の分泌を抑える。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	誤	誤

問34

止瀉薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 収斂成分を主体とする止瀉薬は、細菌性の下痢や食中毒のときに使用して腸の運動を鎮めると、かえって状態を悪化させるおそれがある。
- b ロペラミド塩酸塩が配合された止瀉薬は、食あたりや水あたりによる下痢の症状に用いられることを目的としており、食べすぎ・飲みすぎによる下痢、寝冷えによる下痢については適用対象でない。
- c ロペラミド塩酸塩は中枢神経系を抑制する作用もあり、副作用としてめまいや眠気が現れることがあるため、乗物又は機械類の運転操作を避ける必要がある。
- d タンニン酸アルブミンに含まれるアルブミンは、牛乳に含まれるタンパク質（カゼイン）から精製された成分であるが、タンニン酸と化合しているため牛乳にアレルギーがある人でも使用することができる。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問35

浣腸薬に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 浣腸薬は、便秘の場合に排便を促すことを目的として、直腸内に適用される医薬品であり、繰り返し使用しても直腸の感受性の低下（いわゆる慣れ）が生じないため効果が弱くなることはない。
- 2 浣腸薬は一般に、直腸の急激な動きに刺激されて流産・早産を誘発するおそれがあるため、妊婦又は妊娠していると思われる女性では使用を避けるべきである。
- 3 グリセリンが配合された浣腸薬では、排便時に血圧低下を生じて、立ちくらみの症状が現れるとの報告がある。
- 4 浣腸薬の坐剤を挿入した後すぐに排便を試みると、坐剤が排出されて効果が十分得られないことから、便意が強まるまでしばらく我慢する。

問36

駆虫薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 駆虫薬は腸管内に生息する虫体にのみ作用し、虫卵や腸管内以外に潜伏した幼虫（回虫の場合）には駆虫作用が及ばないため、それらが成虫となった頃にあらかじめ使用しないと完全に駆除できない。
- b 駆虫薬はその有効成分（駆虫成分）が腸管内において薬効をもたらす局所作用を目的とする医薬品であり、消化管からの駆虫成分の吸収は好ましくない全身作用（頭痛、めまい等の副作用）を生じる原因となるため、極力少ないことが望ましい。
- c サントニンの服用後、一時的に物が黄色く見えたり、耳鳴り、口渇が現れることがある。
- d パモ酸ピルビニウムは、アセチルコリン伝達を妨げて、回虫及び蟯虫の運動筋を麻痺させる作用を示し、虫体を排便とともに排出させることを目的として用いられる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問37

貧血用薬（鉄製剤）及びその配合される成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 鉄欠乏性貧血において、鉄製剤を服用していれば、食生活の改善を図ることは重要でない。
- b 鉄製剤を服用すると便が黒くなることがあるが、使用の中止を要する副作用等の異常ではない。ただし、鉄製剤の服用前から便が黒い場合は貧血の原因として消化管内で出血している場合もあるため、服用前の便の状況との対比が必要である。
- c ビタミンB6は、消化管内で鉄が吸収されやすい状態に保つことを目的として用いられる。
- d 鉄製剤の服用の前後30分にタンニン酸を含む飲食物（緑茶、紅茶、コーヒー、ワイン、柿等）を摂取すると、タンニン酸と反応して鉄の吸収が悪くなることがある。

1 (a、b) 2 (a、c) 3 (b、d) 4 (c、d)

問38

高コレステロール改善薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a リボフラビンの摂取によって尿が黄色くなることがあり、これは使用の中止を要する副作用である。
- b 大豆油不飽和化物（ソイステロール）には、腸管におけるコレステロールの吸収を抑える働きがあるとされる。
- c パンテチンは、低密度リポタンパク質（LDL）等の異化排泄を促進し、リポタンパクリパーゼ活性を高めて、高密度リポタンパク質（HDL）産生を高める作用があるとされる。
- d リボフラビンは、コレステロールから過酸化脂質の生成を抑えるほか、末梢血管における血行を促進する作用があるとされ、血中コレステロール異常に伴う末梢血行障害（手足の冷え、痺れ）の緩和等を目的として用いられる。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	誤	誤

問 39

強心薬及びその配合成分に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 強心薬は、疲労やストレス等による軽度の心臓の働きの乱れについて、心臓の働きを整えて、動悸や息切れ等の症状の改善を目的とする医薬品である。心筋に作用して、その収縮力を高めるとされる成分（強心成分）を主体として配合される。
- 2 センソが配合された丸薬、錠剤等の内服固形製剤は、吸収を促すため、口中で噛み砕いて服用するものとされている。
- 3 シンジュはウグイスガイ科のアコヤガイ、シンジュガイ又はクロチョウガイ等の外套膜組成中に病的に形成された顆粒状物質を基原とする生薬で、鎮静作用等を期待して用いられる。
- 4 一般に、強心薬を5～6日間使用して症状の改善がみられない場合には、心臓以外の要因、例えば、呼吸器疾患、貧血、高血圧症、甲状腺機能の異常等のほか、精神神経系の疾患も考えられる。医薬品の販売等に従事する専門家においては、強心薬を使用した人の状況に応じて、適宜、医療機関の受診を勧奨することが重要である。

問 40

第1欄の記述は、循環器用薬として用いられる漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第2欄のどれか。

第1欄

体力中等度以下で、顔色が悪くて疲れやすく、胃腸障害のないものの高血圧に伴う随伴症状（のぼせ、肩こり、耳鳴り、頭重）に適すとされるが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。また、15歳未満の小児への使用は避ける必要がある。

第2欄

- 1 加味帰脾湯
- 2 六君子湯
- 3 七物降下湯
- 4 桂枝加芍薬湯
- 5 猪苓湯

問 4 1

ジフェンヒドラミン塩酸塩が含まれている内服アレルギー用薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 抗コリン作用を示すため、排尿困難の症状がある人では、症状の悪化を招くおそれがある。
- b 緑内障の診断を受けた人では、使用する前にその適否について、治療を行っている医師又は処方薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされるべきでる。
- c 服用した後は、乗物又は機械類の運転操作をしても問題ない。
- d 吸収されたジフェンヒドラミンの一部が乳汁に移行して乳児に昏睡を生じるおそれがあるため、母乳を与える女性は使用を避けるか、使用する場合には授乳を避ける必要がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 4 2

第 1 欄の記述は、漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第 2 欄のどれか。

第 1 欄

体力虚弱で、冷え症で貧血の傾向があり疲労しやすく、ときに下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴えるものの月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい・立ちくらみ、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ、耳鳴り、低血圧に適すとされるが、胃腸の弱い人では、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

第 2 欄

- 1 小青竜湯
- 2 当帰芍薬散
- 3 牛車腎気丸
- 4 桂枝茯苓丸
- 5 乙字湯

問 4 3

アレルギー及びアレルギー用薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a アレルゲン（抗原）が皮膚や粘膜から体内に入り込むと、その物質を特異的に認識した免疫グロブリン（抗体）によって肥満細胞が刺激され、ヒスタミンやプロスタグランジン等の物質が遊離する。肥満細胞から遊離したヒスタミンは、血管収縮、血管透過性亢進作用を示す。
- b 鼻炎用内服薬と鼻炎用点鼻薬は、同じ成分が用いられることはないため、併用しても影響し合うことはない。
- c アレルゲンとして、小麦、卵等の食品、ハウスダスト（室内塵）、家庭用品に含有される化学物質や金属等が知られている。
- d 皮膚感染症（たむし、疥癬等）により、湿疹やかぶれ等に似た症状が現れた場合、アレルギー用薬で一時的に痒み等の緩和を図ることは適当でなく、皮膚感染症そのものに対する対処を優先する必要がある。

1 (a、b) 2 (b、c) 3 (c、d) 4 (a、d)

問 4 4

プソイドエフェドリン塩酸塩が含まれている鼻炎用内服薬に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 プソイドエフェドリン塩酸塩は、交感神経系を刺激して鼻粘膜の血管を拡張させることによって、鼻粘膜の充血や腫れを和らげることを目的として配合されている。
- 2 長期間にわたって連用された場合、薬物依存につながるおそれがある。
- 3 前立腺肥大による排尿困難の症状がある人では、症状を悪化させるおそれがあり、使用を避ける必要がある。
- 4 医療機関でモノアミン酸化酵素阻害剤が処方されて、パーキンソン病の治療を受けている人が使用した場合、体内でのプソイドエフェドリンの代謝が妨げられて、副作用が現れやすくなるおそれが高い。

問45

痔及び痔疾用薬の配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 痔核は、肛門の出口からやや内側の上皮に傷が生じた状態であり、一般に「いぼ痔」と呼ばれる。
- b 長時間座るのを避け、軽い運動によって血行を良くすることが痔の予防につながる。
- c 痔疾患に伴う局所の感染を防止することを目的として、ヒドロコルチゾン酢酸エステル等のステロイド性抗炎症成分が配合されている場合がある。
- d 肛門周囲の末梢血管の血行を改善する作用を期待してビタミンEが配合されている場合がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問46

眼科用薬及びその使用方法に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a コンタクトレンズをしたままでの点眼は、ソフトコンタクトレンズ、ハードコンタクトレンズに関わらず、添付文書に使用可能と記載されていない限り行うべきではない。
- b 洗眼薬には、抗炎症成分や抗ヒスタミン成分が配合されているものはない。
- c 点眼薬は、一度に何滴も点眼しても効果が増すわけではなく、むしろ鼻粘膜や喉から吸収されて、副作用を起こしやすくなる。
- d 点眼薬は、結膜嚢に適用するものであるため、通常、無菌的に製造されている。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問 47

眼科用薬の配合成分とその成分を配合する目的との関係の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- | | (配合成分) | | (配合目的) |
|---|-------------|---|---------------|
| a | プラノプロフェン | － | 目の炎症を改善する。 |
| b | スルファメトキサゾール | － | 目の疲れを改善する。 |
| c | パンテノール | － | 目の調節機能の回復を促す。 |
| d | リゾチーム塩酸塩 | － | 結膜や角膜の乾燥を防ぐ。 |

- | | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 誤 | 正 | 正 | 誤 |
| 2 | 正 | 誤 | 正 | 正 |
| 3 | 誤 | 正 | 誤 | 正 |
| 4 | 正 | 誤 | 正 | 誤 |
| 5 | 正 | 正 | 誤 | 正 |

問 4 8

一般的な創傷への対応に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

a 創傷部に殺菌消毒薬を繰り返し適用すると、皮膚常在菌が殺菌されてしまい、また、殺菌消毒成分により組織修復が妨げられて、かえって治癒しにくくなったり、状態を悪化させることがある。

b 水洗が不十分で創傷面の内部に汚れが残ったまま、創傷表面を乾燥させるタイプの医薬品を使用すると、内部で雑菌が増殖して化膿することがある。

c 火傷（熱傷）は、できるだけ早く、水道水などで熱傷部を冷やすことが重要であり、冷やした後は、水疱（水ぶくれ）を破ってから、ガーゼ等で覆うとよいとされている。

d 出血しているときは、創傷部に清潔なガーゼやハンカチ等を当てて圧迫し、止血する。このとき、創傷部を心臓よりも低くして圧迫すると、止血効果が高い。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 49

きず口等の殺菌消毒薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a オキシドールは、作用の持続性や組織への浸透性が高い。
- b アクリノールは、徐々にヨウ素が遊離して殺菌作用を示すように工夫されたものである。
- c クロルヘキシジン塩酸塩は、真菌類に対する殺菌消毒作用はない。
- d ベンザルコニウム塩化物は、石鹼との混合によって殺菌消毒効果が高くなる。

	a	b	c	d
1	誤	誤	誤	正
2	誤	誤	正	誤
3	誤	正	誤	誤
4	正	誤	誤	誤
5	誤	誤	誤	誤

問 50

抗真菌薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 湿疹か皮膚糸状菌による皮膚感染かはっきりしない場合、抗真菌成分が配合された医薬品を使用することが望ましい。
- b ウンデシレン酸は、患部を酸性にすることにより、皮膚糸状菌の発育を抑える。
- c イミダゾール系の抗真菌薬は、皮膚糸状菌の細胞膜を構成する成分の産生を妨げたり、細胞膜の透過性を変化させることにより、その増殖を抑える。
- d テルビナフィン塩酸塩は、皮膚糸状菌の細胞膜を構成する成分の産生を妨げることにより、その増殖を抑える。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 5 1

ニコチン及びニコチンを有効成分とする禁煙補助剤に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 禁煙に伴うイライラ感、集中困難、落ち着かないなどのニコチン離脱症状は、通常、禁煙開始から1～2週間の間に起きることが多い。
- 2 ニコチンは、アドレナリン作動成分が配合された医薬品との併用により、その作用を増強させるおそれがある。
- 3 口腔内が酸性になるとニコチンの吸収が促進されるため、コーヒーや炭酸飲料など口腔内を酸性にする食品を摂取した後しばらくは使用を避けることとされている。
- 4 ニコチンは、脳の情動を司る部位に働いて覚醒、リラックス効果などをもたらす。

問 5 2

ビタミン成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ビタミンB1は、炭水化物からのエネルギーの産生に不可欠な栄養素で、神経の正常な働きを維持する作用がある。
- b ビタミンB6は、シアノコバラミンとして、ビタミン主薬製剤、貧血用薬等に配合されている。
- c ビタミンDは、腸管でのカルシウム吸収及び尿細管でのカルシウム再吸収を促して、骨の形成を助ける栄養素である。
- d ビタミンEは、タンパク質の代謝に関与し、皮膚や粘膜の健康維持、神経機能の維持に重要な栄養素である。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問 5 3

次の 1～5 で示されるビタミン成分のうち、夜間視力を維持したり、皮膚や粘膜の機能を正常に保つために重要な栄養素で、欠乏すると夜盲症（とり目）が起こる可能性の高いものはどれか。

- 1 ビタミン A
- 2 ビタミン B 2
- 3 ビタミン B 1 2
- 4 ビタミン C
- 5 ビタミン D

問 5 4

滋養強壮保健薬の配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a グルクロノラクトンは、ビタミン様物質のひとつで、ビタミン C の吸収を助ける作用がある。
- b ガンマーオリザノールは、米油及び米胚芽油から見出された抗酸化作用を示す成分である。
- c カルシウムは、骨や歯の形成に必要な栄養素であり、筋肉の収縮、血液凝固、神経機能にも関与する。
- d システインは、生体におけるエネルギーの産生効率を高めるとされ、骨格筋の疲労の原因となる乳酸の分解を促す等の働きを期待して用いられる。

- | | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 正 | 正 | 誤 | 誤 |
| 2 | 誤 | 正 | 正 | 誤 |
| 3 | 誤 | 誤 | 正 | 正 |
| 4 | 誤 | 誤 | 誤 | 正 |
| 5 | 正 | 誤 | 誤 | 誤 |

問 5 5

歯痛薬又は歯槽膿漏薬の配合成分とその成分を配合する目的との関係の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- | | (配合成分) | | (配合目的) |
|---|----------|---|------------------------------|
| a | ジブカイン塩酸塩 | ー | 齶蝕を生じた部分における細菌の繁殖を抑える。 |
| b | グリチルレチン酸 | ー | 歯髄を通過している知覚神経の伝達を遮断して痛みを鎮める。 |
| c | カルバゾクロム | ー | 炎症を起こした歯周組織からの出血を抑える。 |
| d | アラントイン | ー | 炎症を起こした歯周組織の修復を促す。 |

- | | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 正 | 正 | 誤 | 誤 |
| 2 | 誤 | 正 | 正 | 誤 |
| 3 | 誤 | 誤 | 正 | 正 |
| 4 | 誤 | 誤 | 誤 | 正 |
| 5 | 正 | 誤 | 誤 | 誤 |

問 5 6

漢方及び漢方薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 漢方処方製剤は、用法用量において適用年齢の下限が設けられていない場合であっても、生後3ヶ月未満の乳児には使用しないこととされている。
- b 漢方薬は作用が穏やかなため、間質性肺炎や肝機能障害のような重篤な副作用は起こらない。
- c 一般用医薬品の効能効果において、漢方独自の病態認識で言う「脾胃虚弱」は「いらいらして落ち着きのないもの」などと表現される。
- d 漢方薬を使用する場合、漢方独自の病態認識である「証」に基づいて用いることが、有効性及び安全性を確保するために重要である。

- 1 (a、c) 2 (b、c) 3 (b、d) 4 (a、d)

問57

第1欄の記述は、マオウを含む漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第2欄のどれか。

第1欄

体力が充実して、腹部に皮下脂肪が多く、便秘がちなもの的高血圧や肥満に伴う動悸・肩こり・のぼせ・むくみ・便秘、蓄膿症、湿疹・皮膚炎、ふきでもの、肥満症に適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く下痢しやすい人、発汗傾向の著しい人では、激しい腹痛に伴う下痢等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

第2欄

- 1 黄連解毒湯
- 2 防風通聖散
- 3 清上防風湯
- 4 防己黄耆湯
- 5 大柴胡湯

問58

生薬成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ブシは、キンポウゲ科のハナトリカブト又はオクトリカブトの塊根を減毒加工して製したものを基原とする生薬であり、心筋の収縮力を高めて血液循環を改善する作用を持つ。
- b カッコンは、マメ科のクズの周皮を除いた根を基原とする生薬で、解熱、鎮痙等の作用を期待して用いられる。
- c レンギョウは、セリ科のミシマサイコの根を基原とする生薬で、抗炎症、鎮痛等の作用を期待して用いられる。
- d ブクリョウは、バラ科のサンザシ又はオオミサンザシの偽果をそのまま、又は縦切若しくは横切したものを基原とする生薬で、健胃、消化促進等の作用を期待して用いられる。

- | | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 誤 | 誤 | 正 | 正 |
| 2 | 正 | 誤 | 誤 | 正 |
| 3 | 正 | 正 | 誤 | 誤 |
| 4 | 正 | 正 | 正 | 誤 |
| 5 | 誤 | 正 | 正 | 正 |

問 59

衛生害虫と防除に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ゴキブリの卵は、医薬品の成分が浸透しやすく、燻蒸処理を行うのが効果的とされている。
- b イエダニは、吸血によって皮膚に発疹や痒みを引き起こすほか、日本脳炎、マラリア、黄熱、デング熱等の重篤な病気を媒介する。
- c 有機リン系殺虫成分の殺虫作用は、アセチルコリンを分解する酵素（アセチルコリンエステラーゼ）と可逆的に結合してその働きを阻害することによる。
- d シラミの防除には、殺虫成分としてフェノトリンが配合されたシャンプーやてんか粉が用いられるが、フェノトリンにはシラミの刺咬による痒みや腫れ等の症状を和らげる作用はない。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	誤	誤

問 60

一般用検査薬に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 検体中に対象物質が存在しているにもかかわらず、その濃度が検出感度以下であったり、検出反応を妨害する他の物質の影響等によって、検査結果が陰性となった場合を擬陰性という。
- 2 一般的な妊娠検査薬の検査は、月経予定日が過ぎて概ね1週目以降が推奨されている。
- 3 尿糖・尿タンパク同時検査の場合、早朝尿（起床直後の尿）を検体とするが、尿糖が検出された場合には、食後（2～3時間）の尿について改めて検査して判断する必要がある。
- 4 妊娠検査薬は、尿中のヒト絨毛性性腺刺激ホルモン（hCG）の有無を調べるものであり、温度の影響を受けることがあるため、冷蔵庫内で保管するのが望ましい。